



福島県の復興支援の今 富岡町に拠点誕生

事故を起こした東京電力福島第一原子力発電所まで十キロメートルという福島県双葉郡富岡町。事故後は、一部が帰還困難区域や居住制限区域、避難指示解除準備区域とされてきました。その後、除染が進み被ばく線量の低減化対策を講じたことで、今年四月から居住制限区域と避難解除準備区域が解除になり、町外に避難していた住民の帰還が始まっています。この富岡町に、昨年九月長崎大学の拠点が誕生しました。福島県の放射線健康リスク管理アドバイザーとしても活躍中の長崎大学原爆後障害医療研究所(原研)の高村昇教授にお話を伺いました。

「そもそも、長崎大学は二〇一三年に富岡町の隣にある川内村に拠点を作って、被ばく線量の測定や住民の健康管理などを行ってきました。いち早く『帰村宣言』を行った川内村は、住民と行政の努力のかいあって、現在八割の住民が帰村。見事に復興を果たし、今では次の発展段階へと駒を進めています。私たちは川内村で培ったノウハウや信頼関係を他の地域でも生かすべく、富岡町でも拠点を設けて活動を始めました」。

事故前の人口が二千八百人の川内村と、一万六千人の富岡町。異なる点もありそうですね。

「富岡町の人口は六倍で、双葉郡の中でも中心的な存在です。しかも翌年に帰村の動きが始まった川内村と比べ、富岡町は六年間のプランクがあります。この時間は重い。避難先での生活も六年を過ぎると定着して帰還が困難になってきます。したがって川内村と同じやり方が通用するとは考えていません。これまでの意向調査でも、町に戻ろうという人は一〜二割という数字もあります。しかし一番大事なことは、戻った人が『戻って良かった!』と思える環境を整えることです。そう思う人を一人でも多く増やすべく成功例を積み重ねていくしかありません」。

確かに『戻ったけれど不安』となると、町外で迷っている人も決断できませぬね。逆に戻った人の満足度が高ければ、情報伝達されれば、



医学部の学生も実際に富岡町に入り、地元の方々のヒアリングをする実習を行います。福島の人びとの現実の姿にふれ、目からうろこが落ちる学生もいるのだそうです。

ば、情報は伝達されれば、

「そうですね。そのために私たちがやることは、食べ物に対する不安を取り除き食の安全を担保する、内部被ばくの予防と低減化のための努力です。川内村には住民が食料を持ち込める食品検査場がありました。同じ機能のものを富岡町に作る計画もあります。また、帰還のために片付けに来た方々には線量計を貸し出し、住んだ場合の年間被ばく数値を推定して相談に応じるなど、外部被ばくに対する懸念にも応えます。一連の活動は行政と二人三脚ですが、拠点の中心的存在である原研の折田真紀子助教が役場の担当者と頻繁に会って情報共有をしています。富岡町に拠点ができたのは、川内村の遠藤雄幸村長が富岡町の宮本皓一町長の長崎大学を強く勧めてくれたから。こういう口添えが一番説得力があります」。

富岡町復興推進課の新田善之さんにもお聞きしました。「折田先生は四月より週三日拠点到常駐して、町民からの放射線の相談に応じてくださっています。帰町はまだあまり進んでおらず、隣近所のない中でひっそりと暮らす町民もいますが、先生のわかりやすい説明に皆さん安らぎをいただいています」。

「放射線災害復興学」の 学問体系を作り 将来を見据えた人材を育成

高村先生のお話です。

「実は川内村にとっても富岡町の復興は大きな意味があるのです。買い物をは



高村 昇 教授

Nohou TAKAMURA

長崎大学原爆後障害医療研究所放射線リスク制御部門教授、長崎大学医学研究科博士課程修了後、世界保健機関(WHO)の技術アドバイザーを経て二〇〇八年より現職。二〇一一年より福島県放射線健康リスク管理アドバイザーとなる。ゴメリ医科大学名誉教授、ペラルシ医科大学名誉教授。

じめ、医療、学校、職場など、生活の基盤の多くは富岡町に負っており、富岡町の復興がなければ、川内村の真の意味での復興はあり得ないと考えています」。

「後は、町外に住んでいる住民への帰還意向調査で戻るかどうかを考える上で何が一番気になるかを調べ、やるべきことの優先順位をつけていくのだそうです。もちろん空気中や土の放射線・放射性物質のモニタリングも同時進行。やることはたくさんありますが、活動地域が広がることで、人材育成も急務です」。

「専門スタッフが少し増えました。また、昨年からは長崎大学と福島県立医科大学の共同大学院が設置され、災害・被ばく医療科学分野に精通した人材の育成が始まっています。原発事故の折、放射線災害に対応できる人材がほとんどおらずに災害現場や医療現場で混乱がおき、多くの人が不安を抱きました。私たちはその反省から、新しく『放射線災害復興学』という学問体系を立ち上げようとしています。実習は川内村や富岡町でも行います」。

この大学院では、平時のリスクコミュニケーションや災害対応マニュアル、放射線災害時の線量評価、復興時のメンタルヘルス対策など、長期にわたる対応を担える人材を育てています」。

「富岡町の復興支援は、大苦戦必至でしょう。でもね、先日地元の新聞の投書欄に私たちの活動を評価してくれる住民の意見が載っていました。うれしくて、がんばろうと決意を新たにしました」。

高村先生は笑顔でそう語ります。富岡町の復興は始まったばかりですが、長崎大学では息の長い支援を行っていきます」。

福島に“戻って良かった” という声を増やしたい



桜並木も6年ぶりにライトアップされました。10月には電車の乗り入れも再開されるということです。



内陸部の固い岩盤の上にある川内村と違い、海岸沿いにある富岡町は地震や津波にもみまわれ被害も深刻でした。「私も震災直後に現地入りしたとき、うずたかく積まれたがれきを見てあせんとしました。その後、六年間の歳月の中で除染も進み、ショッピングモールや診療所も再稼働しています」と高村先生。ゆっくりですが、確実に人が戻って暮らせる状況を作り出しています。